

新潟市平和推進事業

令和5年度

広島平和記念式典等派遣事業感想文集



新 潟 市

発行にあたって

新潟市では、平成 17 年 10 月 10 日に「非核平和都市宣言」を行い、環日本海の友好・交流の拠点都市として、世界の恒久平和と核兵器の不拡散・廃絶を願い、さまざまな平和推進事業を実施しています。

この平和推進事業の一環として、毎年広島市で開催される広島平和記念式典等に市内中学生を派遣しており、現地でしか感じることのできない原爆の被害や戦争の悲惨さ、平和の尊さについて深く認識してもらい、その体験を語り継ぐ取組を行っています。

今年度は、公募による市内中学 2・3 年生 24 名と引率 4 名の 28 名で「広島平和記念式典等派遣事業」を実施しました。

また、派遣事業に参加した中学生は、新潟市内の戦争被害がもっとも大きかった 8 月 10 日に毎年行っている平和祈念碑献花式にも参列し、戦争当時の新潟市が原爆投下の候補地であり、一時は街から人が避難していなくなったことや、強制連行されあるいは捕虜となった外国の方々も新潟の地で多く亡くなったことなどについても学習をしました。

この度、当事業に参加した中学生の感想を報告文集としてまとめました。

この文集を通して、より多くの人から戦争の悲惨さ、平和の尊さを再認識していただくとともに、戦争の事実が風化することなく後世に語り継がれることを願っています。

目 次

1	日程表・参加者名簿	1、2
2	参加中学生による感想文	
	阿部 優華（東石山中学校）…3	須田 慶次郎（曾野木中学校）…15
	池田 汐那（白新中学校）…4	登坂 尚翔（新潟明訓中学校）…16
	石倉 花夏（山の下中学校）…5	中静 葵（新津第二中学校）…17
	伊丹 壮志（新潟明訓中学校）6	中西 歩倅（下山中学校）…18
	小田 南（小針中学校）…7	菱川 朔椰（曾野木中学校）…19
	北野 知樹（新潟柳都中学校）8	船久保 颯太（山潟中学校）…20
	後藤 綾香（松浜中学校）…9	武藤 由梨沙（臼井中学校）…21
	坂井 絢香（宮浦中学校）…10	山口 夢愛（新潟明訓中学校）…22
	佐藤 光（臼井中学校）…11	山田 朱夏（新潟明訓中学校）…23
	志賀 杏樹（東新潟中学校）…12	山田 陽麻里（中野小屋中学校）24
	宍戸 伯成（附属新潟中学校）13	吉荒 里緒菜（関屋中学校）…25
	新保 利桜（新津第一中学校）14	和田 陽向（新潟明訓中学校）…26
3	新潟市非核平和都市宣言	27

1 日程表・参加者名簿

参加者名簿

氏名	ふりがな	学校名	学年
阿部 優華	あべ ゆうか	東石山中学校	2
池田 汐那	いけだ ゆうな	白新中学校	2
石倉 花夏	いしくら はな	山の下中学校	3
伊丹 壮志	いたみ そうし	新潟明訓中学校	3
小田 南	おだ みなみ	小針中学校	3
北野 知樹	きたの ともき	新潟柳都中学校	3
後藤 綾香	ごとう あやか	松浜中学校	3
坂井 絢香	さかい あやか	宮浦中学校	2
佐藤 光	さとう ひかる	臼井中学校	3
志賀 杏樹	しが あんじゅ	東新潟中学校	2
宍戸 伯成	ししど かずなり	新潟大学附属新潟中学校	3
新保 利桜	しんぼ りお	新津第一中学校	2
須田 慶次郎	すだ けいじろう	曾野木中学校	2
登坂 尚翔	とさか なおと	新潟明訓中学校	3
中静 葵	なかしずか あおい	新津第二中学校	3
中西 歩倖	なかにし ありさ	下山中学校	2
菱川 朔椰	ひしかわ さくや	曾野木中学校	3
船久保 颯太	ふなくぼ そうた	山潟中学校	3
武藤 由梨沙	むとう ゆりさ	臼井中学校	3
山口 夢愛	やまぐち ゆあ	新潟明訓中学校	2
山田 朱夏	やまだ あやか	新潟明訓中学校	2
山田 陽麻里	やまだ ひまり	中野小屋中学校	3
吉荒 里緒菜	よしあら りおな	関屋中学校	2
和田 陽向	わだ ひなた	新潟明訓中学校	3

2 参加中学生による感想文

平和の尊さ

東石山中学校 阿部 優華

私は、8月5日から7日の3日間、広島に行って学んだことはたくさんありました。その中で、印象に残っていることは3つです。

1つ目は、広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式に参列したことです。私はテレビや新聞などで見たことはありますが、実際に参列して参加することは初めてでした。式典には、岸田内閣総理大臣や広島市長、広島県知事などの方々が式典に参加し、平和宣言やあいさつを行っていました。その中で、私は広島県知事のあいさつがとても心に響きました。なぜかというところ、今現在も続いているウクライナ侵攻のロシアの指導者について、色々なことを述べていたからです。広島県知事などが言った言葉がロシアの指導者に届いてほしいと思いました。核兵器の使用や戦争は、絶対にしてはいけないと広島県知事の話聞いて改めて感じました。また、広島市の小学生が平和への誓いを話していました。力強い声、堂々とした姿に心奪われました。この式典で述べていたことが世界中の人達に届いてほしいです。

2つ目は、被爆者の方々のお話です。2歳で被爆した方と8歳で被爆した方のお二人の体験を聞きました。話を聞くと、今に生きている私たちが考えもできないくらい、重いものでした。人が人でない亡くなり方をしたり、道端にたくさんの死体があったそうです。本当に考えられないような悲惨さだったと思いました。悲惨な状況で自分の大切な人が亡くなってしまったのにも関わらず、私たちのような若い世代の人に話をしてくれていて、人類史上最悪の原子爆弾の恐ろしさなどを忘れてほしくない、二度と戦争を起こさず、広島と同じような目に遭わせたくないという気持ちがあるのではないかと思います。その被爆者の方々の思いを引き継いでいくことが大切だと私は思います。

3つ目は、平和記念資料館の見学です。資料館の中には、実際に被爆していた時の服や、写真、絵などが展示されていました。それらを見ると、原子爆弾の威力は本当に大きかったということが分かりました。一瞬にしてたくさんの命が失われ、なぜこれからの未来が楽しみだった人達の命が失われてしまうのだろうか、なぜ本当に原子爆弾を日本に落とそうと思ったのか、ということが私の思う疑問です。アメリカ軍は原子爆弾の威力を確かめるためなど、たくさんの理由があって日本に原子爆弾を落としたそうです。私はそのような理由だけでたくさんの人達の命を奪っていいのかと思いました。二度と戦争を起こさない、核兵器を使わず、平和な世界になってほしいと改めて思いました。

この研修で感じたことなどを、私は家族や友人などの周りの人や次の世代の人、世界中の人達に伝えることが大切だと思います。それに、平和とはどういうものなのかということを経験した人達と考えることも大切だと思います。今後、世界が穏やかで誰もが自由に生きられるようになることを願っています。

私は、平和資料館や平和公園に行きました。平和資料館では、原子爆弾の被爆のために病気で亡くなった人がどういう状況で亡くなったのか詳しく説明されたり、火傷で亡くなった人の様子の写真や原爆が落ちた時の様子のイラスト、実際に兵士だった人の写真と服装などを見ました。私はこれらを見て、命の尊さ、家族の大切さ、友達がどれだけ大事な存在か気づくことができました。

平和公園では、平和の鐘や、原爆の子の像を見ました。特に印象に残っているのは、2つあります。1つ目は、被爆した墓石です。元々は、お寺の墓地にあったお墓の墓石だったけれど、原爆の爆風で、2つの墓石がお墓の左右にそれぞれ飛ばされてしまったものだそうです。私の力では絶対に動かさそうにない墓石が風の力だけで墓石を吹き飛ばすなんて想像できないと感じたからです。2つ目は、原爆の子の像です。これは佐々木禎子さんがモデルとなったものです。佐々木禎子さんは、原爆被爆者の一人で、小学6年生までは元気だったけれど、ある日突然体調が一変して、病院に即入院しました。今までの元気だった禎子さんはとてもとても落ち込んでいたけれど、おじさんに「鶴を折ると願いが叶うよ。」と言われ、その日から、たくさんの鶴を折りました。しかし、病気がよくなることは無く、亡くなってしまいました。そこで、禎子さんの親友がたくさんの寄付を求め、たくさんのお金が集まり、そのお金で原爆の子の像が作られたそうです。私も小さい頃に何日も熱が出て点滴をし、辛かったと感じたことがあります。禎子さんの闘病生活は私の何倍も辛かったはずなのに最後まで鶴を折り続けてよく頑張ったなど感心しました。禎子さんの生きた姿を原爆の子の像として形に残した親友も素敵だと感じました。それから、2歳の時に被爆した方から話を聞きました。私が一番印象に残っている話は、朝6時くらいに空襲警報が鳴ったけれど、警報はすぐ解かれたので、その方はお母さんと電車に乗り、港に行き、煮干しを買おうとした時にまた空襲警報が流れました。その時は自分の家の近くではないため、防空壕に入らず、帰りの電車の中で原爆が落ちたそうです。原爆が落ちた時の閃光で失明した人もいたそうですが、話をしてくれた人は電車に乗っていたため、閃光を強く感じることはなく、失明しなくて済んだそうです。

私は小学5年生の時に学校の図書室でたまたま手に取った本でしか原爆の様子を見たことがありませんでした。その時は怖いと思う程度でしたが、今回の研修旅行を通して、実際に目で見たり、話を聞いたりして残酷だという思いもありますが、関心が深まりよかったなど思っています。被爆者の方の講話には小学4年生の子がおばあちゃんと参加していて、平和への関心の高さに驚かされました。改めて平和とは何かを考えるきっかけになりました。

私が思う平和は会話です。会話をするすることで、人と人との関係が良くなると思ったので、これから出会う人にも会話をして関係を良くしていきたいと思いました。

私は、広島平和記念式典派遣研修に参加し広島県に行きました。3日間で主に4つを見学しました。

まず、平和公園に行きボランティアガイドさんの話を聞きながら見学しました。被爆して亡くなられた方、ご家族、ご友人を亡くされた方を供養するような建造物が多くありました。とくに心に残っているものは「平和の灯」です。平和の灯は東京オリンピックがあった年、1964年の8月1日に火がつけられました。そしてその火は世界から核兵器がなくなったら消されるそうです。

次に、平和記念資料館を見学し、そこには原爆が落ちてまだ形が残っている状態の写真が壁一面に展示されていて奥には亡くなられた方の遺品などが展示されていました。それを見て、原爆の酷さ、恐ろしさを身を感じるようなものがありました。

2日目は、平和記念式典に参列しました。8時15分、原爆が落ちた時間になり、平和の鐘が平和記念公園中に鳴り響いていると同時に1分の黙とうをしました。そして広島市長の平和宣言、子ども代表による平和への誓い、内閣総理大臣、広島県知事、国際連合事務総長のお話を聞きました。そして口を揃えて亡くなった人を供養する言葉を言っていました。それを聞いて一人一人が平和の大切さの気持ちを持っているのだなと実感しました。

次に、2人の被爆者から体験談を聞きました。1人目は「どおい みつこ」さん、2人目は「さど いくこ」さんです。どおいさんは2歳に被爆しました。あまりおぼえていないので、どおいさんのお母さんとおじいさんから聞いた話を主に聞きました。さどさんは、小学校2年生（8才）で被爆されました。実際に体験された話を聞きました。そして、お二人が口を揃えて言っていたことは、落ちた瞬間のことです。ピカッと太陽が落ちてきたような光、そしてドーンというものすごい爆音、私たちが想像する以上のものだと言調から伝わってきました。どおいさんは電車の中にいたので爆風で飛んでいくことはありませんでしたが、さどさんは外で遊んでいたため一緒に遊んでいた妹さんと共に遠くへ飛んでいきました。私はお二人のお話を聞いて、自分が想像していたよりもとても悲惨なものだと心から思いました。

その他にも様々なところに行きました。そして派遣事業が終わって私は心から行ってよかった、実際に行ってみて色々な人の話を聞いてよかったと思いました。これからの人生の役に立つと思います。

今後、世界から核兵器が消え、毎日、世界中の人々が幸せになって世界が平和になっていくことを願っています。

被爆者の声

新潟明訓中学校 伊丹 壮志

広島に人類史上初めての原爆が落ち、広島が破壊されたあの日から78年が経った。

私は広島でG7が行われたことを受け、平和や原爆に興味を持ち、広島に行くことを決意した。

広島に行って印象に残ったことがある。それは、2度に渡る被爆者の証言だ。

そこで私は当時の状況について、マップや絵本、俳句を通してわかりやすく当時を想像しながら話を聴くことができた。当時の心境、被爆した時の家族の様子、そして広島の街並み。そんな話を聴いて私は原爆がもたらした一番の被害は、身体の中まで焼いた熱線や人を吹き飛ばすような爆風、後遺症を残す放射線による死傷者や街の破壊などではなく、生き残った人たちの心へのダメージだと考えた。両親を亡くした子供の悲しみ、子を亡くした母親の絶望など、沢山の家族を一度に無くすのは、想像もできないほどの心へのダメージだったと思う。そんな中、悲劇を繰り返さないため、平和を守るために一步一步、歩みを進めるために立ち直り、原爆を思い出すきっかけになるであろう原爆ドームを残し、広島を日本の、世界の平和の象徴にした広島の人達は素直にすごいと思った。そして、今の平和がたくさんの人の努力で作られ、守られている事を感じた。ここでようやく平和は尊いものだといわれる意味を実感できた。

私は広島に来るまで、人が何人死んだとか、放射線で苦しむ人がいるなどの数字や写真、文字で表現できるものだけが広島に原爆がもたらした被害だと思っていた。しかし広島に行って、実物を見て、被爆者の話を聴いて、原爆の被害は何かで表せるものではないのだと実感した。そして、原爆は本当にあって、それが広島に落とされたことも改めて実感した。私は平和を守り続けるためには核兵器が無くなるまで、そして、無くなった後も世界の平和の象徴として、平和を願い続けてほしいと思う。

私達が平和のためにできることは、しっかりと事実を受け止め、目を背けない事と、私達自身が忘れずに二度と原爆が人を苦しめないように周りの人たちに伝えて、原爆の恐ろしさ、残酷さを周知させることが私達が今出来る、平和を守るための行動だと考える。

あなたは「原爆」と聴くとどんなことを思い浮かべますか。私は2泊3日の研修に行き、原爆は投下された直後の被害はもちろん、その後も続く被害を知り、筆舌に尽くしがたい悲惨な出来事だと感じました。

私が原爆に強い恐怖感を抱いたのは、原爆被害者の方から被爆体験を聞いたことです。知識としては知っていましたが、自分とはどこか遠い存在であった原爆に実際に遭った方がいて、その方からお話を聞いたことで、原爆が投下された日も私たちが過ごしているような当たり前の日常があり、そこにいたのは私たちのような毎日を送る人々だったことを肌で感じました。この方は、当時勤務していた工場の控室に入ろうとしたその時、強烈な光と風が入ってきて工場の隅に吹き飛ばされたそうです。その後、身体は何とか無事で家に帰ろうとしている途中、被爆し、倒れていた人が、水を求めて足をつかんできたそうです。放してもらおうと腕をつかみ、払おうとすると、皮膚がめくれ、体液が流れ出てきたそうです。助けを求める人たちを蹴飛ばすように走り、家に向かう途中の川にはおびただしいほどの遺体が浮かんでいたそうです。その後、原爆によって両親を失い、重いやけどを負った恋人を父親に紹介すると返ってきた言葉は非常に辛辣なものだったそうです。私たちの目をしっかりと見つめ、当時の惨状を思い出すように語る姿からは「もう二度とこのような恐怖を招く戦争をしてはいけない」という強い念のようなものが伝わってきました。

平和記念資料館では、戦後の状況をくわしく知りました。「なぜ自分は生き残ってしまったのだろう」と自分を責め苦しむ人、ケロイドと呼ばれるやけどの跡によって差別された人、両親が被害を受け、一身に家族を背負って働きに出る少女、父親が苦しんでいてもどうすることもできない家族と市役所からはその症状さえ疑われ精神異常者とされた父親。原爆の被害は目に見える傷だけではなく、目には見えない心の傷をも作るのです。1945年8月6日から現在まで続く傷です。

私は、この8月6日にヒロシマで起こった出来事を今を生きるすべての人々がずっと心に留めながら、平和で豊かな社会をつくり上げるために相互に対話を重ねながら歩いていくことこそが、平和の実現、維持につながるのだと思います。大切なのは原爆を悲しい出来事だったということだけで終わりにしないことです。現在の世の中にはいじめやジェンダーギャップ、インターネットによる誹謗中傷や若者の自殺などの社会問題だけでなく、学校や仕事での人間関係など身近なところに平和を脅かす問題がたくさんあります。このような諸問題の核となる部分は原爆にまつわる諸問題と共通するところが多くあると考えます。原爆によって命を落とした方々、生き残り私たちに平和の大切さを伝えて下さる方々の思いや願い、祈りを、私たちが身近な課題に生かしていくことで、身近な平和を積み上げていくことが平和の実現には必要だと考えます。そのためには、歴史に学び、その歴史を忘れずに、今を生きる人々が相互に心と心で対話を積み重ねることが大切です。これこそが死者を弔うことであり、平和の原点であると思います。

「平和は誰にでもできる」

新潟柳都中学校 北野 知樹

今回の研修に行く前も、テレビなどで広島に原爆が落とされた事実や、落とされた後の広島の写真などをこれまでたくさん見てきた。そのため、僕は原爆の恐ろしさを知っている。そう思い込んでいた。

しかし、自分はまだまだ原爆の恐ろしさを理解していないということが今回の研修でよくわかった。原爆資料館で見た、焦げて折れ曲がった自転車や大きく破損した路面電車の写真。「これに乗っていた人はどうなってしまったのか」そう想像するだけで心が苦しくなった。

また、原爆被害者の証言も想像を絶するものだった。ある被害者の方が、「人間が人間らしく死ななかった」と強く語っていた。また、別の被害者の方は、原爆投下当時一緒に遊んでいたよう子ちゃんという妹について語っていた。原爆による突風や非常に強い熱によって亡くなってしまった妹のことを

「可哀想なよう子ちゃん」
と何度も口にしているのが印象に残った。

何も罪を犯していない人々の尊い命が酷いかたちで一瞬にして奪われた。この事実を自分の周りの人に伝えていかなければならない。それが平和のためにできることだと強く感じた。

また、伝える以外のことでも平和は創れると思う。相手の気持ちを考えること、相手を尊重すること、協力し合うこと。どれも当たり前のことのように思えるが、もしこれらのこと誰か一人でも守らない人がいたとしたら、そこから分断が起こり、争いが起こってしまうのだと思う。平和、つまり、みんなのかけがえのない日常を守るためには、みんなの意識が必要なのだと思う。

最後に、僕の願いとして、世界が核という恐怖で脅かし合わなくても平和を保てるような世の中になってほしいと思う。そう簡単なことではないことは十分わかっている。しかし、世界中の人全員が平和のために小さな努力を積み重ねれば、きっとこの願いが叶うのではないかと思う。

「平和の原点は、人の心と心のふれあいだと思っています。」自身の被爆体験を語ってくださった方が、講話の最後におっしゃっていた言葉です。私はこの言葉が強く心に残っています。

私は今回の派遣学習に参加するまで、広島・長崎に投下された原子爆弾について授業で学んだ程度にしか知りませんでした。1945年8月6日午前8時15分、アメリカ軍によって投下された核爆弾。そのたった1発の兵器によって奪われた命。原爆が広島に与えた影響と被害はどれほどだったのか。それらを自分で直接見て、感じたいと思いました。

実際に広島の地を踏み記念公園などを見学し、私が感じたのは強い衝撃でした。被爆したままの姿で残された、当時の凄惨な広島を物語る原爆ドーム。2、3階の壁はほとんど崩れ落ち、周りのはがれきで埋まってしまっていました。本当にたった1発の原爆でこれほどまでに破壊されてしまったのかと、私は背筋が凍る思いでした。資料館には被爆した人々が身につけていた衣服が展示されていました。その一つに折免滋さんのお弁当箱がありました。滋さんは当時中学校1年生で、建物疎開の作業中に被爆したそうです。滋さんは招集中の父と兄に代わって、母のために作物を作っていました。原爆投下の日に持って行ったお弁当は、その畑からはじめて採れた作物で作ったおかずで、滋さんは食べるのをとても楽しみにしていたそうです。結局、そのお弁当を食べることは叶いませんでした。原子爆弾のエネルギーは、50%は爆風、35%は熱線、15%は放射線となって広島の町を襲いました。爆風により建物は倒れ、熱線により燃えるものすべてに火を吹き、放射線は人体に深刻な障害を及ぼしました。原子爆弾の影響はそれらの実態的なものに留まりません。原爆投下後も生き残ったものの、放射線によって後遺症が残り今も苦しんでいる人。原爆によって家族や仲間を失い「なぜ自分だけ生き残ってしまったのか」と自分を責めてしまう人。原子爆弾は生き残った人の心に深い傷を負わせ、そしてその傷は今も癒えることなく残り続けているのです。原爆は、そして原爆を投下するに至った戦争は、平和を壊したと言えるのではないのでしょうか。

戦争はあってはならないもの、もう二度と繰り返してはいけない。先生や身近な大人から言われていたこの言葉が、今回原子爆弾について学んだことでさらに重みを増しました。しかし世界では今でも、戦争や紛争が絶えません。そんな中、私たちが平和のためにできることはあるのでしょうか。

今年、原爆投下から78年を迎えました。被爆から時間が経つにつれ、少しずつ当時の現状を知る人は少なくなっています。ですが、被爆体験は時間の流れと共に風化させていってしまう出来事ではないでしょう。もっとたくさんの方が知るべきことだと思います。そのために、今回原爆について学んだ私たちができることは、周りの人に伝えることではないのでしょうか。親や友達、クラスメイト。自分の身近な人に、一人でも多く、原爆と戦争の恐ろしさを伝え広めること。それが今、平和のために私たちができることだと思います。

記念公園にある原爆慰霊碑には、以下の言葉が刻まれていました。「安らかに眠ってください、過ちは繰り返しませんから」。原爆の被害にあいその命を落とした方々のためにも、一刻も早くこの世界から核兵器が姿を消すことを願います。

「笑顔で幸せに暮らせますように。」これは私が考える平和であり、研修前に灯籠に書いた言葉です。そのときは、抽象的な言葉であり、少し当たり前のことのように感じていました。ヒロシマの原爆は遠い昔の歴史上の悲劇であると思い、本当の悲惨さや被害をわかっていませんでした。

しかし、資料館見学や式典参列を経験し、灯籠を流した後の私は、今まで「平和」という言葉を軽く見ていたような気がし、申し訳なくなりました。

未来に原爆の恐ろしさを伝える原爆ドーム。ガイドさんの話によると、「産業奨励館が恐るべき原爆を世に訴える。」という被爆者の日記に書かれていたことが原爆ドームとして保存するきっかけになったそうです。私は原爆ドームの鉄骨やヒビ、がれきを見て78年前この場にいたらと思うと力がなくなり切なくなりました。原爆ドームがなかったら目で怖さを感じられなかったと思います。原爆ドームを見て辛さを思い出してしまう人もいますが、被爆していない人たちへ伝え、忘れないようにするうえでとても重要なものになったと思います。

平和記念資料館で見て感じたことは生涯忘れられません。私は原爆投下前後の広島市街地を立体模型で再現した映像を観ました。朱色の熱線や爆風、きのこ雲。一瞬にして多くの命や街の明るさが奪われた様子を目の当たりにして、地上にいた人々のことを思い、胸が締め付けられました。また、火傷をした生々しい体の写真は痛々しく、立っているのが精一杯でした。被爆者が描いた絵は真っ赤で黒っぽいものばかりで辛さが伝わってきました。「水をください。」「熱い。」という一言一言が私の胸に突き刺さり、二度とこのような悲惨なことや核兵器が使われることがあってはいけないと強く感じました。

平和記念式典には、たくさんの国の人々が参列していて、唯一の被爆国である日本のヒロシマが世界に知られていることを実感しました。当日、多くのメディアが報道していましたが、もっとメディアの力で世界に発信されるべきだと思います。

式典で一番印象に残ったことは子供代表が述べた「平和への誓い」です。「悪口を言ったり、喧嘩をしたりせず、みんなが笑顔になること。身近なところにもたくさんの平和があります。」この言葉から当たり前だと思っていたことも平和へつながる大切なことであると気付きました。また、残った被爆者へ向けた「生き残ってくれてありがとう。命をつないでくれたからこそ、今、私たちは生きています。」という言葉に心を動かされました。自分が生きていることに感謝をし、今できることを探して積極的に行動していかないと心を決めました。

自分にできることは、平和、被爆者、未来のために動くことだと思いました。被爆証言者の平均年齢は85歳となり、直接お話が聞けるのもわずかです。学んだことについては一つでも、一人でも多くに伝えていきたいです。

二度と起こさないために

臼井中学校 佐藤 光

「戦争や原爆はとても悲惨だからこそ、世界は平和である必要がある。」わかっているつもりでしたが、今回広島へ研修に行き、式典に参加するなどの様々な活動を通して、その核の部分を知ることができました。

初めて見た原爆ドームは、かろうじて外壁は残っているものの中は空っぽで、瓦礫が散乱していて、原子爆弾の恐ろしさを物語っていました。また資料館では、原爆によって溶けた一升瓶や焼け破れた衣服、全身に火傷を負った男性や目の治療をする人の写真などから、当時の甚大な被害を思い知らされ、胸が痛みました。

8月6日の式典では、たくさんの方の平和への思いを肌で感じるとともに、今まで以上に、より良い未来のために尽力しなければならないと強く思いました。その後に行ったワークショップでは、新聞のスクラップを通して、現代社会は平和的でないことで溢れていると知りました。班員と自分の平和についての考えを共有し合うことで、平和への尊さを改めて学ぶことができました。また、原爆被爆者である古家美智子さんにお話しを伺いました。原爆によって怪我をし、残酷な状態になった広島を間近で見て、苦しく辛い思いをされてきたことがひしひしと伝わってきました。生き残ったにも関わらず、大変な思いをされてきたことに悲しみと悔しさを覚えました。そんな感情が今後少しでも減るよう、とうろう流しに臨みました。

3日目の最初に訪れた原爆死没者追悼平和祈念館では、平和祈念・死没者追悼空間や被爆体験記を見学しました。本当にたくさんの方が悲壮な思いで今まで生きてこられたことを感じ、私も奮い立たせられました。

古家さんはおっしゃっていました、「今は当時と似た雰囲気」だと。こうもおっしゃっていました、「戦争はいつまで続くのか」と。古家さんはできるだけ長く戦後続いてほしいとおっしゃっていましたが、私は一生続いてほしいと思います。続かなければならないと思います。そのために、訴えなければなりません。戦争・核兵器は嫌だと。訴えなければなりません。一人一人の意識を変えていかなければならないと。訴えなければなりません。平和な世界で生きていきたいと。私一人の声では足りないかもしれません。ですが、小さな声が集まれば大きな力となります。みんなが声を上げなければなりません。被爆者の数が減少していく今、私たちのような若い世代にバトンを受け継いでほしいというメッセージを古家さんから受け取りました。今回の研修で学んだことを発信し、笑顔の絶えない世界へと変えられるよう、尽力していきます。そして、より輝かしい、温かで平和な未来を目指していきます。

広島に着き、平和記念公園を訪れたとき、私は正直言って、ここが原爆の落とされた場所だとはにはわかには信じられなかった。公園は綺麗に整備され、多くの交通車両も行き来し、周りの街並みも活気に溢れていたからだ。しかし、原爆ドームの今にも崩れ落ちそうな壁や鉄骨、それだけではない、爆風で吹き飛んだ墓石や、はっきりと亀裂の入ったアオギリの樹木などが、そこに原爆が落とされたことを物語っていた。

広島研修では様々な場所に行ったが、特に印象に残ったことは、平和記念公園を含め3つある。

1つ目、公園をまわっているとき、ガイドの方が仰った「瓦礫の上を埋め立てた」ということ。ここを掘り返すと、今でも焼けた土や焼け焦げた物品、骨が出てくる……。今自分は、本当に被爆した町のだ真ん中に立っていると認識したとき、背中がすうっと冷たくなったような気がした。そして、「戦争は人を人でなくする」ということも言われた。皆、自分が逃げるのに必死で、他者を気に留める余裕がなかった、見捨ててしまった。その話を聞いて、私は言いようのない恐怖とやるせなさを感じ、日本で起こったこの悲劇はもう絶対に繰り返してはいけない、と強く思った。本物の戦争の恐ろしさを、私たちは知らない。それでも、この話を持って帰り、ノーモア・ヒロシマ、戦争根絶の意を周囲に伝えることはできるのだ。

2つ目、次にまわった平和記念資料館では、学校ではあまり学べなかった当時のヒロシマについて、とても深く知ることができた。実物の焼け焦げた制服や時計、ケロイド、被爆時の絵や写真など、実際に資料館に行ってみなければとても想像できないような被爆時の惨状を見て、私は声が出なかった。今までほとんど触れてきたことのなかった争いの恐ろしさ、こんなにも戦争はむごいものなのかと衝撃を受け、ゾッとした。また、放射能の被害を多く受けた方々が亡くなるまでの記録が、写真と共にありありと原爆の悲惨さを映し出していた。この広島研修で一番、地獄のような当時の光景がはっきりと目に浮かぶような体験だった。

3つ目、被爆者の方々の証言、講話がとても印象に残った。本保幸雄さんと佐渡郁子さん、このお二人のお話を直接聞かせてもらい、原爆投下時の状況、後遺症、被害……様々なことを事細かに知ることができた。このような方々が辛い戦争を乗り越え、生きて伝えているからこそ、今の広島があるのだと感じた。

この研修で私は、自分たちが戦争、核兵器根絶を次世代に伝えるべきだと感じ、まずは周りの人たちに伝えていこうと思った。未だ戦争があるこの世界で日々、心から笑えるような人々が増えていくことを私は願っている。

遺品の声を聴いて

附属新潟中学校 宍戸 伯成

原爆の日と同じ日差しの下、平和記念公園を僕は「ゴメンナサイ」と心の中で言いながら歩きました。公園は多くの人の生活の場所だったはずですが、そこを僕は許可も得ずに土足で歩くことに後ろめたさがあったからです。クマゼミの「シャン、シャン、シャン」という声が生活音のようで悲しくなりました。

平和記念資料館に行った時、僕が持っている本の鈴木さん一家の写真を見つけました。それは気をつけなければ通り過ぎてしまうような写真でした。鈴木さんには記念館に残った写真の何億倍も家族の思い出があったに違いありません。そうしたら、資料館で僕が見ることができるものは、ほんの僅かな記憶の欠片だということに気が付きました。

この小さな記憶の欠片が「どうして？」と強く僕に訴えかけてくるのです。それに答えることが僕に突き付けられた課題だと思っています。「どうして、原爆が落ちたの？」「どうして、原爆は無くならないの？」と聞かれたら応えられません。もっと困ったのは、「どうして、あなたは行動しないの？」と訴えられた気がした時です。展示室から逃げ出したくなる気持ちになりました。

もう一つ心に響いたのは平和記念資料館に設置してあるのは、「展示品」ではなく「遺品」と教えられたことです。亡くなった子供と一緒に自宅の庭に埋めた三輪車、子供が最後まで抱いていた炭化した弁当箱、亡くなった時に着ていた服。遺族にとっては、いつまでも手元に置いていたい大事な思い出の遺品だったはずですが、これを平和記念資料館に寄付した理由を考えました。鉄カブトと三輪車は40年間、子供と一緒にいたそうです。40年たって家族を思う気持ちが吹っ切れたのでしょうか。そんな事は絶対にないと思います。

遺族の方々は、僕にも聞こえた声に動かされて、遺品の言葉を世界に広げるために遺品を寄付したのでしょう。僕は遺族の方々の決意にはほど遠いですが、家族や友人、学校のみんなに僕が体験したことを伝えていきたいと思います。それが、遺品の声や遺族の気持ちに伝えることになるのだと信じています。

一番心に衝撃を受けたのは被爆体験の話です。それなのに、一生懸命に聞き取ってきたメモを見直しても、伝えようとする文章は歴史年表のように無味乾燥になりそうです。それでは、僕の感じたことは伝わりません。

そこで、僕が考えたのは、被爆体験の話を書く機会を設けることです。そうすれば、多くの人が直接に被爆体験を感じ、自ら平和について考えることができるはずですが。

僕は広島に行けなかった友人のために「もみじ饅頭」を買ってきました。それよりも被爆体験の話を書いてもらう方が「良いお土産になる」と帰宅してから気づいたのです。

「みなさんにとって『平和』とはなんですか。」

平和記念式典で述べられた平和への誓いはこの言葉から始まった。誓いの言葉から伝わる戦争の恐ろしさに心が苦しくなると共に、自分にとっての平和とはどのようなものなのか深く考えさせられる言葉だった。

初日に訪れた広島平和記念資料館では、被爆者の遺品や被爆の惨状を示す写真や資料が展示されていた。広島市の被爆前後の様子について紹介されていた。78年前の8月6日。ヒロシマの焼け野原。火傷と負傷にあえぐ被爆者。家族や友人を失った悲しみに耐えながら必死に生きていく様子。これらは、私が印象に残った展示だ。写真から伝わる生々しい「痛いよー、苦しいよー」「熱い！水を！」「死にたくない……」など一人一人の心の底からの叫びが聞こえたような気がして、こんなに悲惨なことが起こったのかと息を飲んだ。

一方で、二人の被爆者の方から実際にお話を聞くことで、戦争の悲惨さを身近に感じた。原爆が落ちた瞬間、辺りが光り、この世の終わりかと思うくらい大きな爆音が鳴り響いたあと、爆風により一瞬にしてヒロシマの町だけではなく、人々の人生も吹き飛ばされたようだ。熱線、爆風、放射線の3つが人々に与えた被害はとても大きかった。被爆直後に出た障害だけではなく、長い年月が経ってから病気が見つかることもあったようだ。さらに、食べ物や生活物資も簡単に手に入れることができず、常にお腹を空かせ、日常生活を送るのは困難だった。学校に行っても、勉強はほとんどさせてもらえず、戦争のためにかり出された人たちの仕事を手伝っていた。このように、たった1発の爆弾が、多くの人々の当たり前の日常を一瞬にして奪った。火傷で水がほしくてたまらなく、川に飛び込み、鉄道草を絞った汁を飲んで生き延びていた、思い出すこともつらいような出来事を私たちに語り継いでくださった。

友達と遊び、一緒に勉強すること。毎日おいしいご飯が食べられること。私たちが毎日当たり前前に生活していることがどれだけ平和で幸せなことかに気づかされ、日々感謝して生きていこうと思った。

被爆された方々はみんな同じ思いを持っていた。それは、もう二度と戦争を繰り返してはいけない。そのために、78年前の辛い出来事を若い世代に語り継いでいかなければならないという平和への思いだった。平和の原点は人の心と心のふれあいであり、絶対に核兵器を使ってはいけないという強い思いがこもったものだった。

この研修で、これからは私たちが平和な未来を作っていかなければいけないことを気づかされた。核兵器が地球上にあり、いつどこで同じ事が起きるか分からない今、自分に出来ることは、この3日間で感じたことを身近な人に伝えることだ。そのことが、「平和」とはなにかを考えるきっかけとなる。平和への思いが広がり、今後世界から核兵器が消えて、いつか平和記念公園の平和の灯火が消える日が来ますように。

平和についての学び

曾野木中学校 須田 慶次郎

正直、私は平和に対してすごく甘い考えを抱いていたと思います。行く先々で見聞きする悲惨な当時の現状は私に大きな影響を与え、誤った考えを正してくれたと思います。その中でも特に印象に残っているものを2つ紹介します。

1つ目は、平和記念資料館にあった、当時の「被爆した人の写真」です。かなり種類があり、どれも目を背けたくなるような物ばかりでした。火傷によってぼろぼろになった皮膚、原形を留めていない顔、幼くしてぼろぼろになった体、あまりに非日常的な写真に本当に衝撃を受けました。今までは、原爆は大量に殺人を犯したとしか思ってなく、どんな風に人々を苦しめたのかは知りませんでした。ですが、これらの写真を見て、原爆がどれだけひどい物なのか考えが改まりました。原爆という物は絶対に存在してはならないと強く思いました。先程、目を背けたくなるような写真ばかりと言いましたが、どれも目で見て、感じて欲しいなと思いました。

2つ目は、原爆被害者証言のつどいでの石井和子さんの話です。被爆した人が読んだ句を主に紹介してくださりました。一つ一つの句が生々しい表現であふれていたのも、その時の情景のイメージがしやすく、心に直接語りかけられている感じがしました。よく「うじ」という言葉が句に入っていました。被爆した人はよく体にうじが湧いていたそうです。正直あまり想像しがたい光景ですが、俳句として表現されているのでかなり伝わってきました。俳句で表現するというのは多分めずらしいと思うので、かなり良い体験だったと思います。さらに、一部の句には重ねて文で句の情景が掘り下げられている物がありました。会社の同僚と一緒に避難する話や、奇跡的に生き残ってお風呂に入った話など多種多様でした。ただ全ての話から原爆の凄惨さが伝わってきました。

私は、この3日間で数え切れない程の学びを得ました。その学びから私は原爆を持ってはいけないという考えが確信に変わりました。こんな一個人の意見で世界は変わらないと思う人もいるかもしれませんが、ですがいくら一個人の意見でも一人の意見は変えられるかもしれません。もし意見を変えることができたなら、その人がまた別の人の意見を変えていく。そうすればいつか世界が変わるかもしれません。私は、この世から原爆という物が消えるその時まで、原爆をよく知らない人達に原爆の悲惨さ、そして人類がいかに過ちを犯したかを声を大にして伝えていきたいです。

8月6日、8時15分広島に1発の原子爆弾が落とされ多くの人の命が奪われました。

僕は広島に行き、原爆に対する感情が大きく変わりました。今までは教科書上で学習しただけだったので、一部の写真を見ただけや、すぐほかの単元にいったりと、原爆に関して詳しく知る機会がなく、原爆という言葉自体がすごく遠いものだと感じ、また今の自分には関係ないと思っていました。

まず、平和記念公園を見学した時にはお墓がボロボロに崩れていて、とても驚きました。また、崩れたお墓の破片が様々な方向に飛んでいることから、爆風がとても強く、複雑に吹いていたことが分かりました。ちなみに、爆風は秒速440mと音の速度よりも速いことにとっても驚きました。

次に、平和資料館に行った際、いたるところに穴が空き、ボロボロにやぶれている服があったり、着物の模様が焼き付いた体、ひどくたれた皮膚の写真を見て、言葉が出ませんでした。また、いつも自分の後ろにある影が、石に焼き付くことがあることに驚きました。ほかにも、いざ目の前に建物が粉々になっている写真を見た時、教科書とスケールが全く違い、仰天しました。

平和記念式典では、もちろん内閣総理大臣も出席していましたが、国際連合事務総長と世界各国から注目されていることを改めて認識しました。また、一般の人々で外国人観光客が多く目立ちました。「非暴力は人間に与えられた最大の武器であり、人間が開発した最強の武器よりも強い力を持つ。」という言葉は、かつてインドの独立を達成するための活動において非暴力を貫いた僕の尊敬するガンジーの言葉です。僕はここが式典で一番心に残りました。

被爆者証言の際は、当時の詳しい話が聞けました。水を求めて川に飛び込む人が多数いて川が死体だらけになったり、黒い雨が降ったり、兵士さんたちに水を求める人がいたりなど当時の情景を思い浮かべることができました。特に気になったことは、多くの人々が水を求めた時、火事を消す時用に備蓄していた水を飲み、その水を飲んだ人たちが全員死んでいったことです。兵士さんから水を飲むなと言われていたにも関わらず、飲んでしまうぐらい熱線により体の内部が焼けるように熱かったことにとっても驚きました。また、被爆した路面電車が今でも走っており、部品などは戦前のものを使っている車両もあるそうです。

灯籠流しの際は沢山の人が川の近くに集まり身動きが取れませんでした。また原爆ドームもライトアップされていて昼とはまた違う雰囲気がありました。

原爆ドームを見学した時、思っていたより原形があり、間近でしか感じられないこともあるのだなと思いました。レンガ造りの建物でチェコ人の建築家が設計したと聞きました。爆心地からかなり近いところで被爆し、周りの建物は全て壊れているのに、この建物だけ壊れず建っていたことに驚きを隠せませんでした。

僕たちは広島に初めて行き、原爆についての恐ろしさや痛さが全く分からず、正直大袈裟すぎだな、とまで思ったこともあります。しかし、今回原爆のことについて間近で詳しく聴き原爆は人類史上最大の過ちとも思いました。また今では技術も進化してきているので、原爆の何倍の威力もある爆弾がこの世には存在することを知りました。僕は、次の世代にもその次の世代にも原爆の恐ろしさを伝えていきたいと思っています。そのためには更に詳しく原爆のことについて学習していくことが大切だなと思います。今後世界が、永遠に平和であることを願います。

生きること

新津第二中学校 中静 葵

私が今回の広島派遣研修中で心に残ったことは2つあります。

1つ目は原爆資料館です。資料館に来ている人は外国人が多く、中に入るとみんなの顔が変わり重々しく独特の空気が流れていました。資料館には原爆の威力、被爆者のボロボロの服、溶けている食器、当時を描いた絵や写真、放射線による病気などが展示されていました。その中でも特に印象に残ったのは「人影の石」です。これは住友銀行広島支店の入口階段を切り出した物で、階段に腰掛けていた人は近距離で原爆が炸裂し逃げることもできないまま死亡したものです。原爆の強力な熱線により階段は白っぽく変色し、腰掛けていた部分だけが影のように黒いまま残りました。この資料を見て原爆は逃げる時間もなく、一瞬にして命が奪われるほど恐ろしいものだと感じました。他にも川に浮かんでいる遺体をかま口で引き上げている絵に驚きました。説明によると沢山の人が亡くなったため引き上げられた遺体は、山のように積み上げられあちこちで火葬されていたそうです。この絵を見て、丁寧に引き上げる暇がないくらい沢山の人が亡くなったと思いました。亡くなった親族の方は火傷で皮膚が垂れさがって顔を区別できなくて最後の別れが出来なかった人もいたそうです。顔が火傷で区別できなくなるほど原爆の威力はすごいものだと感じました。

2つ目は、原爆被害証言者の古家美智子さんのお話です。古家さんは3歳の時に爆心地から1,200mで被爆しました。爆風によりガラスが刺さり、物の下敷きになっているところをお父さんが助けてくれたそうです。境内の方へ避難しましたが、そこは遺体の山を火葬していて避難出来なかったため、さらに遠くでトタンを屋根にして野宿したそうです。生き残った人はなぜ自分だけが生き残ったのか自分を責めたり、後遺症によって今でも苦しんだり、差別を受けたりと原爆は生きていくのも辛いものだと感じました。古家さんは、とにかく若い人に語り繋いでほしいとおっしゃっていました。戦争のことをよく知らない政治家が増えくるとまた戦争、悲劇を起こしてしまうと。今、ウクライナとロシアが戦争していますが古家さんは戦争前と同じ風が吹いているのを肌で感じているそうです。一生をかけて語り部として生きていくとおっしゃっていました。

この研修で、私はより多くの人に原爆について知らせないといけないと思いました。実際に私も原爆についてよく知らなかったし、昔の話だから現代には関係ないと思っていましたが、学んだ後はたったひとつの爆弾で沢山の命が奪われたこと、放射能の影響で今でも苦しんでいる人がいることを身に沁みて感じました。原爆被害証言者が高齢化により二十数人しかいない今、いち早く原爆の恐ろしさを伝えていかないということを感じて、私も学校で伝えていく際は恐ろしさが伝わるように全力で伝えたいと思います。

広島で学んだこと

下山中学校 中西 歩倅

私が3日間で学んだことは、原爆の恐ろしさと平和を伝えることの大切さです。その中で印象に残ったことは3つあります。

1つ目は、広島平和記念資料館に行ったことです。原爆が落ちた後の広島について知ることができました。インターネットで調べ、想像していたより、生々しくて悲しくなりました。原爆が落とされたことによって亡くなった方だけでなく、放射線を浴びたことによって苦しみながら亡くなった方など、たくさんの理由によって亡くなった方がいることも資料館で知ることができました。家族が亡くなって子供だけになってしまった写真や、真っ黒焦げになったお弁当。黒い雨を浴びたことによって黒くなっている服や、熱さに耐えきれず変形しているお茶碗など、今では想像できないようなことばかりでした。原爆の恐ろしさをしっかりと目に焼きつけることができました。

2つ目は、平和記念式典に参加したことです。小学6年生が誓った「平和への誓い」。最後まで、鳥肌が止まりませんでした。平和について考え、自分たちにできることを伝えてくれました。大勢の前で「誰もが平和だと思える未来を、広島に生きる私たちがつくっていきます。」という誓いを聞いたとき、私はこの言葉は広島に生きる人だけでなく広島で生きる人以外でも同じだと思いました。その言葉を忘れずに他の人に伝えていきたいです。

3つ目は、実際に被爆した方からお話を聞いたことです。話して下さった古家美智子さんは3歳の時に被爆し、今年で81歳になるそうです。助かった美智子さんですが、「どうして私の家族が死んだのに、あなたは生き残っているの？」と言われ、辛い思いをしたそうです。また、小学校のクラスでは、被爆者だということを隠しながら生活している人も多かったといいます。それは、「差別やいじめを受けるかもしれない。結婚ができなくなるかもしれない」という理由などからでした。また、「戦後というカウントがいつまで続くのかを危惧している」とも教えて下さいました。美智子さんは、「いろんな目線で考え、原爆が落とされた真実を認めることが大切であり、原爆はたくさんの当たり前を奪うものである。もう二度と、そのあやまちをしないでほしい。」というふうにおっしゃっていました。

私は広島に行き、一人一人がどうしたら平和に暮らせるのかを考えることが大切だと思います。今、世界には核兵器が1万2,500発ほどあります。核兵器が世界からなくなるよう、私ができることを精一杯頑張ります。

平和の尊さ、命の大切さ

曾野木中学校 菱川 朔椰

僕は8月5日から7日に広島での派遣研修に参加してきました。そこでは原爆の恐ろしさや平和の尊さ、命の大切さについて学ぶことができました。そして被爆者講話やワークショップなどの体験もできました。研修前の僕は平和の尊さがあまり分かっていないところがありました。広島での活動で平和の尊さを強く感じられた体験が3つありました。

1つ目は平和記念資料館見学です。そこでは原爆に関する様々な資料が展示してありました。亡くなった方の写真や当時の服、大火傷を負った方の写真などでした。特に大火傷を負った方の写真が今でも頭から離れません。皮膚は焼け焦げ誰かも分からないし、子供までそのような状態だったからです。その写真から強い衝撃を受け、なぜこのようになったのだろうと考えた時に「原爆が落とされたせいだ、もう二度とあってはならない」と気づかされました。このような体験から原爆の恐ろしさ、平和の尊さについてわかってきました。

2つ目は原爆被害者証言のつどいです。そこでは被爆体験をされた保安さんから当時の状況や、平和への想いについて直接語っていただきました。現在保安さんは92歳で、被爆時は14歳頃だったそうです。保安さんは原爆が落とされた時に爆心地から1,200mほど離れたところにいたそうです。そこで急にピカッと光ってドオンという大きい音が聞こえ、ものすごい爆風に吹き飛ばされ意識を失ったそうです。意識が戻り逃げている途中、大人の人に足を掴まれ「連れて逃げてくれ、もう動けない」と言われたが、無理だったので蹴飛ばして逃げたそうです。翌日、線路に遺体がズラッと並べられていて、保安さんはお姉さんがいないかを必死に探したそうですが全身傷だらけの人ばかりで見つからず明日にしようと思われ、次の日に来ると遺体が全て回収されていて、姉を見つけるチャンスを失ってしまったと言っていました。僕は広島派遣の中でこのように細かい状況を聞いたのは初めてだったので、実感が湧き強い恐怖を覚えました。

3つ目は平和記念公園見学です。そこは爆心地の近くの公園で慰霊碑や様々なモニュメントをボランティアの方の案内で見て回りました。教科書でよく見る原爆ドームや原爆の子の像などがあり、原爆ドームは実際に見ると外壁が崩れて下に落ちていたり、元の建物からは想像できないほど焼け焦げていました。さらに、元々5段だった墓石もあったそうですが複雑な爆風によっていろいろな方向に飛ばされていました。ここからどれだけすごい爆風かが分かりました。

最後に、僕が今平和のためにできることは、原爆での出来事を多くの人に伝えたり募金などをしたりすることです。そして、戦争をしてはいけないルールを作りたいです。

平和に対する考え

山潟中学校 船久保 颯太

今回の広島研修を通し、特に印象的だったことが2つあります。

1つ目は、原爆による被害が思っていた以上に大きく悲惨だったということです。僕は原爆被害者の証言を実際に聞き、原爆を体験された方はこういう風景を見てこういう人生を送ってきたんだということを学んできました。突然空から原爆を落とされ、大きな火傷を負い、兵隊も誰も助けてくれなかったというお話や、火傷により水が欲しくなり川へ入った人々が全員命を落としたというお話を聞いて僕は胸を締めつけられるような気持ちになりました。そして、衝撃的だったのが原爆が落とされたのちに生き延びることが出来ても、食料がないことや家がないこと、放射能による病気、さらには被爆者を対象とした差別があったというお話を聞き、絶対に二度と戦争を起こしてはいけないなと思いました。

2つ目は、平和記念式典は想像していた以上に世界的影響力のある式だということです。当日平和記念式典へ行くと、東京にも劣らないくらいの人々が式典を目的として集まっていました。また、ニュースやメディアでも大きく取り上げられていて、世界一丸となって平和に関心を示し平和を願う姿勢に感動しました。

以上のことを踏まえ、僕は平和を実現させることはそもそも可能なのかということや、平和のために今自分が出来ることは何か等、様々なことを考えました。人と人が関われば争いが生じるのは仕方ないことだから、それをどう戦争へ発展させないかが大切だということ、戦争がなくなる理由は戦争に勝った国が得をして、以前より豊かになるから等、色々と考えた結果、世界を平和にするために僕が今出来ることは、絶対に戦争だけはしてはいけないという考えを周りの人に広め、そういった風潮を作りさらにその風潮を、世代をこえて継いでいくことだと思います。僕は今回の研修で得たことを周りに広め、今後世界から戦争がなくなることを願っています。

広島派遣研修という形で平和について考える機会を得て、授業やネットの情報だけでは学べないことを、とても楽しく勉強することができました。いつ再び戦争が起こるか分からない時代だからこそ、広島で学んできたことを活用して戦争を繰り返さないようにしていきたいです。

私たちが出来ること

白井中学校 武藤 由梨沙

私は広島に行って被爆者からの講話を聞いたり資料館の見学をしたり、この旅でしか出会えない仲間達と充実した3日間を過ごしました。その旅の中で印象に残ったことが2つあります。

1つ目は、被爆者からの講話です。今回、話を聞いたのは佐渡郁子さん。佐渡さんは現在の小学校2年生の時に爆心地から870mという至近距離にある祖母の家で妹と遊んでいた時に被爆したそうです。佐渡さんは当時水を飲むことを我慢したことで、ここまで生きてくることが出来たそうです。皆さんは現在の温暖化の地球で水を飲まずに生活することはできるでしょうか？きっと難しいと思います。しかし、現在よりも過酷な状況で水を飲むことに耐え、熱線による暑さから逃れ、水欲しさのために川や防火水槽へ飛び込む人たちがいるなかで、水を飲むことを我慢することが出来た佐渡さんは、よく耐えることが出来たなあと感じます。そして講話の最後に佐渡さんは、「平和とは人間の心と心の触れ合いでできている」とおっしゃっていました。そんな過酷の状況をくぐり抜けてきた佐渡さんから出る優しい言葉に私は感動しました。

2つ目は、平和記念式典です。広島の小学生在が堂々と発表していました。その内容は、原爆により仲間を失った曾祖父が、自分が生き残ったことに対して責めていたという内容でした。原爆は亡くなった人だけでなく生き残った人をまで不幸にし、その罪のない人たちにこのような気持ちにさせることはおかしいと思いました。そして小学生は、最後に言いました。「自分の思いを伝える前に、相手の気持ちを考えること。友達の良いところを見つけること。みんなの笑顔のために自分の力を使うこと。」全てすぐく当たり前の事なのに自分たちが出来ていないことを思い知らされ、私は心を揺さぶられました。人としてとても大切なことを自分より年下の小学生に教えられました。これらは全て簡単に出来ることなので、少しずつ始めていきたいと思います。

この広島派遣研修を通じて思ったことは平和について考えることはそう簡単なものではなく、戦争などの残虐な過去を知り深く学ぶことで、世界中のお互いの足りないところを補い合っていかなければいけないと思いました。私が考える平和のために出来ることは、思いやりを持って相手の気持ちを考え行動する事だと考えます。今後、世界が良いこと悪いことの見極めをつけ行動すれば、いずれ平和になると私は考えます。原爆という無差別大量虐殺を通じて世界が戦争の愚かさや平和の尊さを知り、世界が平和になることを願っています。

平和への歩み

新潟明訓中学校 山口 夢愛

私は今回の広島派遣研修を通して、さまざまな場所に行き、学び、肌で感じてきました。その中でも特に心に残っていることは、被爆体験の講話と平和記念式典の参列です。

被爆体験の講話は佐渡郁子さんからお話を聞かせていただきました。郁子さんは1937年8月22日に広島で生まれました。郁子さんは国民小学校2年の7歳の時に、爆心地から約870mの地点にある、おばあちゃんの家で被爆しました。原爆が投下された1945年8月6日午前8時15分、郁子さんは妹と一緒に家の庭で遊んでいました。原爆が投下され、郁子さんと妹は熱線によって吹き飛ばされました。郁子さんは4.9シーベルトの放射線を浴びたそうです。郁子さんの妹は原爆投下によって全身に大火傷を負い、8月8日に亡くなり、公園で火葬されました。郁子さんは手や額を火傷しました。被爆後、郁子さんは水を飲みたくなり、兵隊さんに「水を頂だい。」と言ったけれど兵隊さんは絶対に水をくれませんでした。兵隊さんは「水を飲むと死んでしまうから飲んではいけない。」と郁子さんに言い、郁子さんはその約束を守り、水を飲みませんでした。郁子さんは水を飲んだ被爆者が次々に亡くなっていくのを目の当たりにしたそうです。郁子さんは東練兵場に行き、そこで野宿をしました。たまに兵隊さんは硬いカンパンをくれたそうです。しばらくして、テツドウグサという草の絞り汁を飲んだそうです。「平和の原点は心と心のふれあいだと思う。」そう郁子さんは最後におっしゃっていました。郁子さんは講話の時に亡くなった妹のことを「私の可愛い可愛いヨウコちゃん。」と呼んでいました。郁子さんは、被爆で放射線を浴びたことによるガン、目の病気になりました。たった1発の原爆は生き残った人の、心にも体にも深い傷を負わせたことが身をもってわかりました。

平和記念式典への参列は私にとって初めてのことで、とてもドキドキしました。いつもはテレビの中でしか見られない式典を実際に見ることができて、とても良い経験になりました。また、さまざまな人が「平和」についてのスピーチや宣言をしていたけれど、人によって視点や考え方が少しずつ違うことがわかりました。「平和」とは人によって少なからず異なり、「平和」を一言では言えないことを学びました。

私は広島派遣を通して日本は唯一の被爆国としての果たすべき役割は最近の世界情勢を見るとますます重大で、大きなものとなっていることを知りました。私一人でどうにかなるような問題では決してないけれど、「平和」について考え続けることは誰にでもできる、とても大切なことだと考えます。これからも「平和」について自問自答をしたりしながら考えを深めていきたいです。

「思いやりと協力の心」

新潟明訓中学校 山田 朱夏

私は、8月5日から8月7日、新潟市の広島平和記念式典派遣に参加しました。

今回が私にとって初めての広島訪問でした。出発する前は、原爆が落とされた街として、もっと暗く、田舎で、まだ原爆の爪痕が街に残っていると思っていました。しかし、到着してみると、明るく、都会で、緑豊かなとても素敵な街だと知りました。きっと、78年前の8月6日の朝もこんなに明るく賑やかな街だっただろうに、たった一瞬で破壊されてしまったと考えると、胸が痛くなりました。

この3日間の研修で印象に残っていることを1つずつ紹介します。

1日目は、平和記念資料館です。入ってすぐ目に入ったのは、壁全面に大きく展示されている、原爆によってボロボロになった「ヒロシマ」の街。倒壊した建物と沢山の瓦礫、丸こげになった地面、葉が全てなくなり、たった1本の幹だけになった木。今の広島からは全く想像できない悲惨な写真に、衝撃を受けました。また、原爆が落とされた当時の焦げたお弁当や8時15分で止まった時計などが展示されていました。

2日目は、平和の象徴である原爆ドームです。初めて原爆ドームを見た時、想像以上に小さくて、原爆の威力の前によく持ち堪えられたなあと思いました。しかし、周りを見てみると、原爆ドームだけ、時が止まっているかのようで、78年もの長い間、広島復興の象徴であった特別なパワーを感じました。また、原爆ドームを訪れ、戦争の過ちを目の当たりにし、二度と戦争を繰り返してはいけないと改めて感じさせられました。

3日目は、被爆体験者の佐渡郁子さんから話を聞いたことです。郁子さんは国民学校2年生だった7歳の時に、爆心地から約870m離れた祖母の家の庭で、妹と遊んでいた時に被爆されました。郁子さんたちは気を失い、気づいた時には家から遠く離れたところまでとばされ、郁子さんは手と額に、妹は全身に火傷を負ったそうです。郁子さんたちは、祖母と3人で練兵場に避難し、午後、母と再会したそうです。しかし、2日後に妹が亡くなってしまい、その後、祖母、父、いとこ3人は原爆死で、母は胃がんで亡くなりました。郁子さんもこれまで、脱毛と3つのがんを患った、と語ってくれました。沢山の人の命を奪い、生き残った人も放射線によって苦しませる、核兵器の危険性を痛感しました。また、がんと闘いながら、辛い原爆の話をしてくださった郁子さんは平和に対する強い思いがあり、私たちはそれを伝え続けなければいけないと思いました。

最後に、「平和とは何か」。私は、この3日間色々な人の平和に対する考えを聞きました。人それぞれでみんな違う考えを持っていましたが、共通して言えるのは、「思いやりと協力の心」だと私は考えます。争いは争いをさらに生み、平和は達成されません。平和を達成するには、話し合いをし、手を差し伸べることが大切だと思います。そのために、私は、この研修で学んだことを心に留め、少しでも多くの人に伝え、周りの人をより大切にしていきます。1日でも早く戦争がなくなり、世界中が「思いやりと協力の心」で溢れることを願っています。

広島派遣研修

中野小屋中学校 山田 陽麻里

私は広島派遣研修に行つて、どれほど辛く、悲惨なことだったのかを改めて知りたくて応募しました。私は広島原爆について浅はかな知識しかなく、教科書で読んでいたくらいでした。研修に行つて、特に心に残っていることは2つあります。

1つ目は、平和記念公園です。一つ一つの建物や建設されたものの形とデザインが特徴的で、意味があるということです。被爆者や亡くなった方々を慰める、安心させるという意味があると分かりました。公園全体で原爆は良くないもので、苦しんだ方々がたくさんいると伝えている感じがしました。私は特に、「平和の灯」が心に残っています。核兵器が地球上から姿を消す日まで燃え続けるという反核悲願の象徴としています。とても辛い出来事だったので、無くなってほしいと願う反面、世界には数万個もの核兵器を所持しているという恐ろしさを感じました。1日でも早く核兵器が無くなるといいなと思いました。

2つ目は被爆体験の講話です。二人のお話を聞かせていただきました。どちらの方のお話も生々しく、言葉だけでも苦しくなりました。原形をとどめていない人や今にも崩れてしまいそうなビルで看病をするなど、考え難いありえない事が本当に起きたという事実がとても苦しかったです。亡くなった方はもちろん、生き残った方も大火傷をするなど後遺症に悩まされ、とても大変だったと思いました。家族や親戚が亡くなり、自分一人だけ生き残っても自分を責め、本当に辛いと思いました。生き残っても、精神面でも、肉体面でもとても辛く、苦しいことだと思いました。一人一人の講話の方が話してくださった内容は全く違ったけれど、色んな視点から聞くことが出来て、改めて、原爆は本当にあつてはいけな、悲惨な出来事だったと分かりました。

被爆体験をした方々が減ってきて、広島原爆が現実離れしてきていますが、世界でもう二度と起きてはいけな出来事なので、広島派遣研修で学んだことを一人でも多くの人に伝えていきたいと思いました。また、平和の視点を持つことが大切だと思いました。そのために、人との心と心の触れ合いや、思いやる気持ちを皆が持つことが大切だと思います。今後、世界から争いが無くなり、皆が平等に過ごせる社会になっていくことを願っています。

広島を学んで

関屋中学校 吉荒 里緒菜

私は8月5日から8月7日までの3日間、とても素晴らしい体験をすることができました。私の姉が広島に住んでいるため、広島とは縁を感じていました。しかし、姉が住んでいる広島にはどのような歴史があり、どのような過去があったのか知りませんでした。そんな時、教室に貼ってあった広島行きの掲示板を見つけ、是非行ってみたいと思いました。

広島に行ってきた広島に対するイメージがガラリと変わりました。原爆のこと戦争のことを道徳や国語、歴史の勉強で知っていたつもりだったけれど、やはりその場に行ってみて感じたことは想像よりも悲惨で心苦しいものでした。私が特に印象に残っていることは、平和記念資料館です。心構えが甘かったなと思いました。展示しているものは全てにおいて生々しく特に写真は思わず目をそらしてしまうものが多かったです。今までどこか漫画の世界みたいだと思って、本当にそんなことがあったなんて信じられなかったけれど、資料館の展示を見て本当にあったことなのだ、漫画の世界じゃなかったのだと深く思い知らされました。「魂の叫び」というブースでは被爆で亡くなられた方のお顔と、ご本人が実際に使っていた遺品と一緒に展示されていました。真っ黒に原形が残されていないような遺品とご本人の顔写真を比べて、この方が本当に生きていたのだ、あの日あの時確かにその場にいらしたのだと思い、とても心が苦しくなりました。でもきっとそうやって自分の写真と遺品と一緒に残してもらって生きていた証拠にしてもらっている方は亡くなった何十万人のうちのほんの一握りであり、何も残されなかった方、探してさえもらえなかった方もたくさんいるのだろうと思うと胸が痛みました。遺品や写真など周りの観光客の方は写真に収めている人が多かったけれど、私はあまりの怖さにカメラを向けシャッターを押すのがとても怖くて仕方ありませんでした。写真では伝わらない実物の迫力さや生々しさはカメラロールに残すのはなんだか違うような気がして、私は資料館で写真を撮ることを諦めました。私はそこで見たものを自分の心の中に閉じ込めておくことにします。

最後に、私が広島に行ってきた様々な体験をして感じたことがたくさんありますが、一番大事なことは「知ること」だと思いました。知らないことには何も始まりません。広島の悲惨な歴史、平和について、戦争紛争について、今の世界の問題について、私たち若者にはまだわからないことがたくさんあります。それを一つずつ知って自分のものにして、更によく考えて、それから自分のできる行動をしていくことが大切だと思いました。今、被爆者の数はどんどん減少しています。ではその方々がいなくなったら、誰も広島のことを伝えられないのでしょうか。私たちは、かつて日本にこのようなことがあったことを知らないまま生きていいのでしょうか。この歴史を伝えるのは次世代の日本を担う私たち若者です。私たちがこのことを伝え、残して、更に次の世代に残していかなければなりません。これが亡くなってしまった被爆者たちにできる一番の敬意だと思います。具体的に何ができるのか、またゆっくり考えて少しずつ今回の研修で学んだことを活かしていけたらいいと思います。

平和への道

新潟明訓中学校 和田 陽向

これから僕が広島で実際に見てきたこと、聞いてきたことを皆さんに発表します。戦争そして原爆の恐ろしさを少しでも知ってもらえたら嬉しいです。

今回僕が広島に行って一番感じたことは、平和の大切さです。今回、どの見学場所に行こうと必ず戦争の恐ろしさを実感できました。僕が特に心に残ったことは3つあります。

まず1つ目に、「広島平和記念資料館」に行った時のことです。そこでは原爆により壊されたもの、大怪我を負われた方や亡くなった方の写真など、原爆の無惨さが語られていました。僕が一番心に残っているのは、3人の中学生の制服です。これは疎開中にある中学1、2年生3人が原爆に被爆しました。そこで3人は亡くなってしまい、その時に着ていて、残った制服の様々な部分を合わせて一つの制服の形にしています。自分と同年代ということでも感情移入してしまい、この制服を見ただけで本人の苦しみが伝わってくるような作品でした。

2つ目に、平和記念式典で印象に残っている言葉があります。それは広島市長さんが言っていた言葉で、「世の中には原爆を落として戦争を早く終わらせたほうがいいと言っている人がいますが、あなたはその原爆に被爆した人への責任が取れますか?」と言っていました。僕はこの言葉にとっても納得しました。原爆の恐ろしさを全く知らない無責任な人への「責任」を感じてもらおうということは核廃絶に向け、大きな一歩になるのではないかと感じました。

3つ目に原爆に被爆された古屋美智子さんの話を聞いた時のことです。古屋さんは被爆当時3歳でこのお話は父と姉から聞いた話だそうです。彼女は爆心地から1.2km離れたところで被爆しました。8月6日の朝、空襲警報発令。その時空襲警報はすぐ止み、防空壕から出て古屋さんは家の中で座っていたそうです。そして8時15分原爆が投下されました。3歳で下着だけだった古屋さんは、体の右側の顔から体にかけて無数のガラスが突き刺さり、落ちてきた天井の下敷きになってしまいました。すぐ古屋さんの父が助けに来ましたが、この時古屋さんは血だらけで泣き声も上げなかったそうです。この時古屋さんの父は死んでしまったと思ったそうです。

古屋さんが記憶に残っているというのが、学校で原爆被害者の子をいじめていた人がいました。その人に先生が涙ながらに「なぜ弱物をいじめるの?情けない。悲しいよ。」と言っていたそうです。戦争は生き残った人も辛い最悪なものです。そして古屋さんは「今の世界は戦争の匂いがする。」と言っていました。戦争を知っている人の肌感覚です。また、政治に任せていては昔のようにまた戦争が始まってしまうとも言っていました。平和になるには「傍観者」になるのではなく、しっかりみんなで立ち上がらなくてははいけません。核戦争が起これば人類が、地球がなくなります。

原爆被害者の佐渡さんは平和の原点は人間の心と心の触れ合いだとおっしゃっていました。これは私たちの日常生活に通じるものがあると思います。皆さん一人一人の心の触れ合いが平和につながります。皆さんも自分にとっての平和とは何か考えてみてください。

新潟市非核平和都市宣言

わたしたちのまち新潟市は、
日本海に面した湊町、また、実り豊かな田園地帯として発展してきました。
いま、市町村合併によって、新・新潟市に生まれ変わり、
水と緑に恵まれた魅力ある国際都市として、
本州初の「日本海政令市」を目指しています。

先の大戦で、わたしたちは、尊い生命や貴重な財産を失いました。
新潟市は、広島・長崎と並ぶ原爆投下予定地のひとつでした。原爆を恐れ市民が一斉避難した日もありました。
あれから60年。
わたしたちは、現在のわたしたちの暮らしが、戦争による多くの方がたの尊い犠牲の上に成り立っていることを
忘れてはなりません。そのことを後世に伝えていかなければなりません。

核兵器の廃絶と世界の恒久平和が、わたしたちの永遠の願いです。
しかし、いまだに世界各地で紛争が絶えません。
飢餓、貧困、差別、人権侵害、環境破壊……、平和な暮らしを脅かすものが、世界に満ちています。
わたしたちの暮らす北東アジアでも緊張関係が続き、核兵器の脅威が強まっています。
わたしたちは、核兵器の不拡散、そして廃絶を強く訴えます。

わたしたちの安心で安全な暮らしを脅かす全てのものを無くすこと。
地球上の全ての人がとが、平和で豊かな暮らしを送ること。
地球全体が、共生互惠関係を築き、ともに繁栄発展すること。
それが、わたしたちの願いです。世界の人びとの願いです。
わたしたちは、そのために不断の努力を重ねていきます。

海のみこは、友となる国くに。
わたしたちは、世界の平和のかけ橋となります。
子どもたちの未来のために、
わたしたちの暮らす北東アジアの人びとが、世界の人びとが手をとりあって、
日本海を「平和の海」に!

新しい新潟市誕生の記念すべき年に、
核兵器の不拡散、そして廃絶を願い、
環日本海の友好・交流の拠点都市として、
北東アジアをはじめ広く世界に向けて、
新潟市が非核平和都市であることをここに宣言します。

2005年10月10日 新 潟 市

令和5年度
広島平和記念式典等派遣事業
令和5年8月
発行 新潟市総務部総務課